

第9講 科学的文体 (6/18)

作成：田中重人 (東北大学文学部准教授)

[今回のテーマ] 文章に「科学的」な装いを持たせるための注意事項

1 「科学的文体」の基本

「概念」と「用語」の1対1対応
事実と論理に基づいて意見を展開する
事実は、主観をまじえずに記述する
具体的・明確に事実を書くことで説得力を高める
はっきり言い切る姿勢

2 概念と用語

論文の文章では、おなじ概念は常におなじ言葉であらわす(いいかえてはいけない)。また、すこしでもちがいのある概念には、そのつどちがう用語をあてる。参照した文献中でこのルールが破られている場合でも、そのまま引用するのではなく、用語を統一したり、注釈を加えたりして、概念と用語の対応関係をあきらかにしておくこと。

3 事実と意見

3.1 「事実」とは

真/偽の区別が意味を持つ命題であって、個人の主観から独立したもの

例：私は来週富士山に登る。
富士山には月見草が生えている。
つぎの授業は休講である。

事実は、究極的には、真であるか偽であるかのどちらかである。ただし実際には、さまざまな事情のために真偽がわからない場合がある。なお、真である事実を「真実」という。

3.2 「意見」とは

個人の内面にしか存在しないもの(感情・価値・評価・思考・推測・意思・期待など)あるいは真/偽の区別が意味を持たない(判断基準が確立していない)命題

例：私は富士山に登りたい。
私は富士山が好きだ。
富士山には月見草がよく似合う。
富士山は高い山である。

発言や文章が存在する(した)かどうかは、真/偽を判定できるから「事実」である(その発言や文章の中身には関係ない)。

例：太宰治は『富岳百景』で「富士には、月見草がよく似合う」と書いた。

事実について思考／推量／評価しているという現象は「意見」である。

例：今後も高齢化は続くだろう。

つぎの授業は休講だろう。

太宰治は『富岳百景』で「富士には、月見草がよく似合う」と書いているらしい。

以上は教科書での区分である。別の理解の仕方としては、

- 客観的な事柄と主観的な事柄についてそれぞれ確実性の度合いを異にするさまざまな表現がある
- これらのうちで、客観的なことについて確実性の高いものを「事実」とよび、それ以外のものを「意見」と呼ぶと考えるもよい。

3.3 事実と意見の区別

事実と意見はできるかぎりわかる。セクションまたはパラグラフのレベルでわけておくのがのぞましい (cf. 実証研究の論文の基本形)。最低限、事実を記述する文には意見を混ぜないこと。

その効果を識別するため、対象者を2群にわけて分析をおこなった。

対象者を2群にわけて分析をおこなった。これはその効果を識別するためである。

3.4 根拠のある意見

論文の文章においては、できるかぎり確実性の高い客観的な事実に基づいて意見を組み立てることが重要である。

- さまざまな資料・データにあたって、確実な情報をあつめる
- 事実に基づいて主観的な意見を述べる
- 自分の漠然とした感覚ではなく、具体性を持った事実の裏づけを集めること

4 はっきり言い切る姿勢

事実についても意見についても、表現をぼかさず、はっきりと言い切ること (教科書 p.)。

× …………… といっても過言ではない。

× …………… ではないかと考えられる。

推量の表現としては、「おそらく……である」や「……の可能性はある」などを使う。そのほか、確からしさの程度を異にするいろいろな表現があるので、よく吟味して使い分けること。推量の確からしさについて、具体的な根拠を示せればなおよい。

5 宿題

この授業で提出したパラグラフ作成課題と中間レポートをみなおして、今日の授業内容に照らして問題がないか点検する。問題になりそうな部分を抜き出して、どういう点で問題があるか、どう書き直せばよいかを書くこと。